

29 ゴールドラッシュの伊豆、幾たびか

～貨幣改鑄と経済発展～

1 伊豆の金山開発

静岡県では駿河国で、奈良の大仏が造られた8世紀頃、砂金が発見されている。伊豆や梅ヶ島金山は有名であるが、現在採掘している金銀山はない。

伊豆の鉱山開発は、1577（天正5）年、後北条氏の家臣富永氏によって採掘されたとされる土肥間歩金鉱（伊豆市）に始まるといわれる。江戸幕府にとって、幕初以来、金山を支配し開発することは、幕府財源の確保のための重要な施策であった。そのため、幕府は石見銀山・佐渡金山とともに、伊豆の金山開発にも力を入れた。湯ヶ島・瓜生野金山（いずれも伊豆市）は1597（慶長2）年から、縄地金山（河津町）は翌1598年から採掘が始まったとされる。毛倉野金山は遅れて貞享～宝永期（1684～1711）の発見であった。「佐渡年代記」に1601年大久保長安が伊豆・石見・佐渡銀山の支配を命じられたことが記され、1606年、伊豆金山奉行となったことから最盛を極めた。1604年8月10日、伊豆・石見より佐渡銀山へ銀山巧者の者が呼び寄せられ、山師として銀山を預けられる者が36人いた。そのなかで、佐渡相川の地役人三嶋惣左衛門が伊豆銀山へ遣わされ、伊豆銀山において50俵取となった。『徳川実紀』には、「慶長11年（1606）京中に高札を立てれば、諸国の金掘どもが伊豆の金鉱を掘ろうと雲霞のごとく集まった」とあり、大久保長安は1607年に河津町の縄地神社に鰐口を奉納したのをはじめとして、他の神社へも鰐口・釣灯籠を奉納し、新たな神社を勧請して鉱山の隆盛と安全を祈願した。

1608年10月5日、家康のいる駿府から佐渡相川への書状によって石見銀山・伊豆銀山の盛況が伝えられ、全国各地で金山開発の成果がみられている。1610年の相玉天神社の棟札に、金山開発を行った伊豆代官の竹村九郎右衛門の名がみえる。1621（元和7）年には銀山採掘担当者の川野新右衛門らによる加増野村新田検地があり、これ以前に銀山開発があったことを示す。加増野や相玉（下田市）にも間歩（坑道）があり、かなりの量の採掘があったものと思われる。土肥や縄地・湯ヶ島など知られた金山ばかりでなく、伊豆半島全体が金山のようであった。ところが、1613年大久保長安の死去により生前の不正が発覚、7人の遺子は切腹して責任をとることになった。伊豆の金山は、竹村九郎右衛門らが引き継いだ、1625（寛永2）年、ほとんど採掘を停止した。

〈表1〉1677（延宝5）年『伊豆鏡』にみられる金銀山

鉱山名	種類	間歩
瓜生野	金	かな山 採掘停止中
牧之郷	金	かつはやし 採掘停止中
大平	金	深沢山 採掘停止中
	金	式百枚
湯ヶ島	銀	横山・たいら・おふぼん間歩・かね沢・はい間歩
	金	堅岩山
縄地	金銀	中山・しょふ沢・雲城山
毛倉野	金	ゆかはら
	金	日向洞・楠木山・いちびばら
土肥	銀	立ほら
	金銀	大横屋・かき山・新横屋・柿木

『清水町史』別編資料集1「金銀山之事」より作成

2 金山開発と貨幣改鑄

1677（延宝5）年『伊豆鏡』に伊豆金銀山の開発の様子が記載された〈表1〉。この時期の開発は『増訂豆州志稿』に「貞享二年、綱吉財政の窮乏を救はむとして、復本州の鉱山を開く」とあるように、貞享から宝永（1684～1711）に、〈表1〉の金山や、三津・戸沢村（現在の薬師沢鉱山跡で沼津市・伊豆の国市）などで再試掘を行ったが、江戸時代の間には再び

慶長期のような繁栄をみることはなかった。

正徳年間（1611～16）、三津村（沼津市）で銀山の試掘が行われた。南伊豆町の毛倉野金山では1774（安永3）年3月試掘、1823（文政6）年、湯ヶ島金山で試掘延長願が出される。1843（天保14）年、毛倉野金山では100日の試掘許可上申書が葦山代官役所から勘定奉行へ提出された。これら金山開発は、慶長の幣制以来、江戸時代には7回、明治2年を含めると8回あり、

〈グラフ1〉に示した改鑄時期と前後して開発

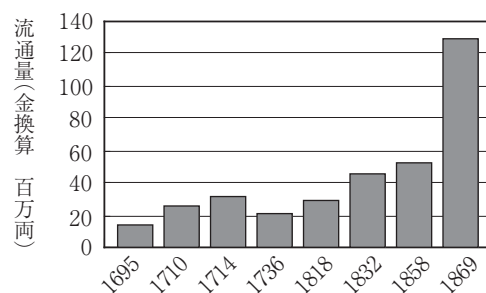
が行われたことがわかる。貨幣改鑄は、1695（元禄8）年に初めて行われた。慶長小判が磨耗して切れ金や軽目金が生じてきたというのが表向きの理由である。しかし、東大寺大仏殿の火災などによる南都六大寺の復興や、5代将軍徳川綱吉の乱費、「米本位制」のなかで「米遣い」の経済であるはずの江戸時代経済が「金遣い」経済に移行し、金の絶対量の不足が生じたことが真の理由と考えられる。そこでさらに金山開発を進めようとしたが、金不足のため純度の低い貨幣となってしまった。しかし、貨幣経済の進展は止められず、金・銀貨の流通総量は元禄小判の改鑄により約5%程度増加した。正徳の改鑄（1714）では、インフレ抑制のため再び高純度の貨幣の鑄造を行ったが、そのためには鑄直し以外に多くの金を生産しなければならなかった。

金山とはいえ、金銀は同じ鉱脈のため同時に生産される。幕府は江戸の米相場を常に1両＝1石に安定させ、米遣いの経済の安定化、すなわち、旗本などの禄米の安定を図った。しかし、〈グラフ1〉から、元文改鑄時（1736）に一時の景気の冷え込みはあるにしても文政時（1818）になると金遣い経済はさらに進行し、市中に出回る貨幣量は膨らんでいった。他の物価上昇に対しては物価引き下げ法令を出しても追いつかず、金銀の不足は免れなかった。伊豆の金山は鉱脈が短いため長続きはせず、新たな鉱脈を探さなければならなかった。

明治新政府に移行しても金不足は否めず、他国に借金をして動き出すことになった。そこで明治初年から殖産興業政策も含め、多くの鉱山の開発を手がけることになる。1869（明治2）年には毛倉野金山、1871年には縄地金山でも再掘が始まった。

近代に入ると、外国との戦争に対して戦費が必要となる。日清戦争以後、多くの鉱山が稼働し、大正末から昭和初期に産金奨励が行われた。しかし、1943（昭和18）年になると、金の採掘ではなく、アルミニウムなど軍需増強のために必要な鉱石の採掘が重視され、それ以外は採掘はしないという金山整備令が出され、多くの鉱山は廃鉱となった。戦後になり、日本が飛躍的な経済復興を遂げた裏には、伊豆の金山からの多くの産金があげられる。しかし、残念ながら、現在、伊豆には金を採掘している鉱山はない。金を採掘しているのは、鹿児島県だけになってしまった。

〈グラフ1〉江戸時代における金貨・銀貨の流通量の変遷
（金貨・銀貨の合計を金換算したもの）



大塚英樹 「江戸時代における改鑄の歴史とその評価」（日本銀行金融研究所『金融研究』第18巻第4号）より作成

〈参考文献〉

大塚英樹「江戸時代における改鑄の歴史とその評価」（日本銀行金融研究所『金融研究』第18巻第4号）